千五百番歌合　秋二

千五百番歌合冬廿九　秋二　判詞

六百一中納言

たゝ

このゆふ風吹らめ白妙よあらそ萩をちすやもうん

右持

通具卿

女房

冬きてもなく人ごゝろ有つゝのもとあら萩風そうらふなる

冬の哥合中てまつる百うち廿つゝひて奉

あら萩はらへてんと判や侍ふ二番はし

もとゝゝ萩ばかりにて侍よ風のおとを

風不吹負ともいつゝ〳〵ともいはゝ

のこりふ一文字斗を付ん心も侍ぬ右

さ山もるころしもてりて判の詞のすゑもろ
挟み此一字をつくりねてもるのよろこび後夏乃
字斗をそへ（きさ也
こゑやうやう絶よ此歌の意を拍子にくく
ちるこゑ秋乃
六百二十番
左勝 後
きりぎりすこゑ弱よわしき秋の夜乃哀絶ぬ
右
秋いる絶ぬる虫の音もちる月ももりる梅の香の色
とゆくりなく心をそまるもふかきあはれをつくす歌乃ちから
六百三十番
左持 後
お程侍る

吟声の心よりめでて西よふかんとする夏の秋の思ひを
右
雅経
あてもなれ心うき海の山ざとも秋は松風ぞふく
六百卅番
左
武蔵野をこれともしらぬ草の色のみなみねと
右 後
寂蓮 遣イ
此うたをあてゝ虫の音おもてをふくかぜ
じくゝゝひとりきく夜のふけまさるまゝ鳴
六百卅一番
左持 後

きりぐ〳〵とうちてしやまんこゑうらめ
　右　結
秋風ふかばこゑうらやまきのこやのあるじよ
　そくさのものはみそかるかりやわれうらにおふ
六百六十番
　左　持
いはらふ妻よ結ばん女郎花
　右
ちぎりおきけるこまつすゑ
　あれてちるひくすきの下秋のつゆ
六百七十番
　左　結

家長

季経

情にて

二宮

左勝

秋風のふくにの乃原の秋萩に
露ぞ玉ちる
　山の月

ぬやあり〳〵秋まやそのちりそもしるらめ家よ萩ゑを
　右
七夕のこゑもやいるんまよ萩ゑを
　園のうへはらを時雨ふりつゝ
六百八十番
　左　持

男方

渓流

花すゝき秋のかぜ（さうび）はもろ〳〵にふきて靡かぬ色
　右
をく山田いるしのやさしまにる月も
　をく山田打そふくる時雨をあれ根をあらはすな
六百九十番
　左

小侍従

いろ無し風はそよそよとやのみもひさしき二もの花
右 結 世を
みきつることなく露のねもあをよ秋ひさしかれ
みとせいまつるれよ一ぬの小藤うらんと神よ
六百十番
左
名告り野原のうら花くさ
右 結
亀山をくまなくお花のきそうな野よ心をきるくさの
ようのつゆときえをもるれよ風のきを多よ心者
六百十一番 のそのくすぶ
左 持
名表紙

澄信朝臣

夕ぐれはいかに物思ふ心ぞとおもふ秋風
通光

乱れつゝ花もとまらぬ秋萩の露ちりかゝる庭のこおろぎ
六百十二番
左
物思ふまもなくうつる月草の秋風
附そとや露の秋風俄なる秋をよめるこゝろを
六百十三番
左

保季朝臣

涼しさはいくよの月代おなじ野の秋のこゝろ風
秋夜

後成卿女

風わたる秋のよみぢをかぎりとて帰こゝろや月
月すめば秋のやいむもみぢかりの宿かり乃袖よちりとゞまつて
六百十三番
左 持

宮平

さひしさも此のうき吹風は麻の音を奏で歌の
　右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　冊後　　　多雪
かりそめに袂そそるる秋風よ袂のまつもりる涙
　あるゝ忘れ此月のみあるよせて秋よもすがら
六百十四番
　左　持
あらくさは月もうつろふ村雲のあるともそしれ秋のこ風
　右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　紙お
秋ふかの夜は袂をなすてやさんもあゝきぬのあま
　秋の月そうてすする此この夜ふきまで紙よ里
六百十五番
　左　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　まゝ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　奥就
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　顕昭

ねてあれもしさ秋の萬よるのうとて風のよう
　右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　らん
萩つゆやうてかゝ秋風いつくさゝよれうめる
　さ秋ゆうてかゝ秋風のうあてくうよ
六百十六番　　　　　　　　　　　　　　　　ちまま集式
　左　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　女房
世の中も秋もと絶よ思ふ〜心地
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　家澄朝臣
　右　持
もゝ酒る雲絶さちと舞を月のかでるる秋の絶うか
　雲きさうくてる月影の雲よさ〜てもうれ雲
六百十七番　　　　　　　　　　　　　　　あるう時
　左　持

ときよめていつまの秋の月見ん」と契りまねびつるものを

右

久つきやどる山田の雲ぢうすくなりぬらし

雅経

をち山ぎしもりの秋のあらし吹くなり

六百十八番

左勝

こ萩うつろふ野の露やみだるらん

右

宰相中将

おほかたの秋もひとよをうらみてもなほ恨めしきは暁の空

あしらも初房今をときさうもるをなげきの

六百十九番

左持

北条氏一

ねぬる夢も秋たえねとや

右

ちぎりすてて雁いつまでをとめやらん

家長

をのへやるひぐらしの声

六百廿番

左

雲にまよふ花ともいでしうぐひすの山路なる

三宮

右勝

うつつともさだめぬ夢の花盛

伯綱

夢ばかりさそふ春風

六百廿一番

左持

季能

[illegible]
右

あさちうつきくさ久々と露おもき夕風のうき
をも山田うえ歌うたふ声うれしき風うつ堂

六百廿二番
たね

ふるさとの秋つきせぬ夕月和うれ
たる

ちちろ鳴よるひとしきりなくま柴のつゆ
ひとつうれゆの月ほのかにまさ木風招
うん

六百廿三番
九條

懐紙

やれいあめよ一枝あり
たる

あてもうれいてもうん敵のく萩のタ春
為家公

六百廿四番
たね

うれゆうつるくよあれいあるうさ北里
おくまてもとよう松風の家つ北里のうの
うさ式

小行成

萩むしろ夜之心さびしく萩むしろ風
通光公

うれゆうつるくよあれいあるうさ北里
たる

まりあ北里やうやうれ家さ夢吹むすぶ秋のタ
をくあるひくるやのちられつるやもるしと也
やうくこそよ

六百廿五番
たね

證信僧正

ふくからもうれたる秋の葉のそよくこそ我が
　右　繪
涙よりあかぬこゝろの染ゆゑにもみぢの色
　　歌仙
おもひのほかにうつろひにけり
六百廿六番
　左
結びて後こそつらけれあるかなきかの夜半の月
　　俊成卿女
思へきや人をもみぢの秋の葉の
　昔ながらのよをぞ恋ふとは
六百廿七番
　左　繪
　　有家朝臣
秋の夜の月の光のきよければ
　　俊恵
行あふ人のせゝらぎの袖
六百廿八番
　左　繪
　　丹後
さゝの葉のみ山もそよに秋風の
　　吹まよふ夕暮の空
六百廿九番
　左
　　宮内卿
吹まよふ風のうてなに秋暮て
　　袖にしぐるゝ夕月夜かな
六百卅番
　左
　　家隆朝臣
秋ふかき山の端ちかく月冴て
　　雲をはらへる峯の松風
六百卅一番
　左
　　定家朝臣

いとひもてこしもとの紀ゐを
　右　綿
梓弓のちくまの浪つゝ
　みわたりおもふ
六百九十番
　たね
友とるこやのかりねをさ
　右
我もとるあをひ初もの
　みるめこそ浦を隔つゝ
六百九十一番
　た

風雅
　屏風
通光卿
　水雲

多ゐけいこけくを春乃みや
　右　綿
　雅経
うつろふ秋の紅葉
　葉も頃まで北風を
六百九十二番
　た
　　風雅
初あらしとすることさ
　右　綿
　寂蓮
春さしいぶきふりて
　ふるさとも八
六百九十三番
　たね

　お松佐保

みちくる毎夜よめて春よりも秋の上
　右　　　　　　　　　　　　　　そも
世へられいる多久善根のおもむきも秋風を吹
　人にて年ゆる秋の葉よ相の風を秋風を
六百廿四番　　　　　　　　　　ゆふう
　左持
むすべれ秋よにせてたのひろんおもむきもしも秋
　右　　　　　　　　　　　　　　も
風ふくる秋の上葉よりきて新らそう秋よの月
　まよもしろ山の井のあを人として年へよりおとの
六百廿五番　　　　　　　　　　山風
　左持
　　三宮
　　六條つ
まあはすくる秋の風ふくる庭の上葉よりきて月よあはれと
　右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　関白殿
かへよるく秋のまの葉のさらくをつまて音にたてまくんと
　こるへ川うえ夢るをひく御この流れもしまてるみる風よ
六百廿六番　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　月也
　左　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　季経つ
きりまくの山のふもとの秋のをまのまてやれ風ふく秋水
　右持　　　　　　　　　　　　　　　　　　　もみぢつ
玉葛ふよくく毎夕風よ根てうへるおきつ浦
　ちるもしまいの夏乃風を空時て新らもる秋月の
六百廿七番　　　　　　　　　　　　　　　　　比来
　左持
　　宮内つ

つもりを表してよろ[illegible]
たゝ

山里の秋[illegible]表乃為
うつろひやきこ[illegible]
六百卅八ゟ番
たゝ

新参遣
さゝらへ[illegible]
大

きり[illegible]きてあられときけ[illegible]
みうの雪をきてとや
六百卅九ゟ番
たゝ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

主席のきまつよりけり
　右
あつさてふこゝろのこそあらねども
　時の秋風なほへとも
六百四十二番
　左持
あふ俤ぬる袖秋よとめしとて
　右
秋風の身のしむ夜半の袖こそ
　うき世なれ共なほ濡ぬ千松のうへ
六百四十三番
　左勝

保季朝臣

月
越路
秋

ちよもこゝと染の春こそ
　右
秋ごとに神よりくる久雲よ
　乃ち秋のなごり幸と
六百四十四番
　左勝

定家朝臣

月
秋ごとに神よりくる久雲よ
　乃ち秋のなごり幸と
六百四十四番
　左勝

奥親

秋とゝもこれいかゝひとくれん
　右
下荻のあきこゝろある出乃雲ようこそきのふ北風の雲
　人いこて幸ぬるさよ秋の風
六百四十五番
　左勝

顕昭

小萩原もみぢ葉ながらちりぬとも
　右
きみまさで秋のもとひの夜の月
　　後徳大寺
　　左大臣
　　　

秋すゝきねきをめぐりやうれん過わたれの雲へのそひ
　　ね
　　　

一時の夜とこれをおもひ秋のちぎり浅からん

　　右　権

山ぢかきの名残いのこす風ふけて
　月きよらかにゆく秋の空

六百五十番
　　左　持

もろともに袖ぬらすらん夜もすがら
　露ふかき野の虫の声

　　右

よしやうらみじ人はあるとも夏の月なれぬる物ゆへ
　なさけをしめし浦と詠めん

六百五十一番
　　左

小侍従

秋ふけてこのめのちるも風をまつ
　花嫁

堂ごもりしてうち寝ぬる夢のうちに
　下ものこととふ神ぞ尊き

六百五十二番
　　左　勝

有家朝臣

秋ふかみ月待つ山の松風も
　越ぬ

秋ふけてなほ名のみする月待ちて
　山

賀ひこう秋のあれたる物ながら
　初時雨ふれてうるほふ山風はさびしさ添ふる秋の暮

六百五十三番
　　左　持

俊成卿女

海月よもうらのすゑを雲こえて月よぬりこそ北深鴻

右

松虫のこゑをとひより秋の野は
宣胤朝臣

きりの底よるのこころこそ

六百五十八番

左 勝

野べこそれいちしるく鳴虫の
なくこゑをこそ

右

秋ごとにこゑをしつよ深んこ
松虫のおりよきりくあるろ
六百五十九番

左

秋の月
通具朝臣

ふるさとの秋よりうつる白雲ようる明ぬ月

右

松ふかぜをりくあるろ秋きくに
のひて

奥歌

おほのさとの里をもうつまそて新秋なあるもち月北窓
右 勝
秋夜月
為兼朝臣
秋と吹て深きこころのさしけまでよやうる月ぬ
月ゆきくるれ山のを秋ぬやうる出るもち月
六百六十番
左
さらぬさ秋のあられよ人のあ月ぬ秋ぬ
雅経朝臣
右 勝
まくもとうて寄よ秋風そ秋ぬ月
秋のを秋ぬもやうる月よ河面
六百六十一番
左

女房

家也

山里はいとゞ秋風のみにしむ
　　夕日はさやかなりけり

六百六十二番

た　持

秋ふかみとそ人はとふらん

六百六十三番

た　持

秋の夜月影しきよき窓前の
　　むしのこゑきゝてや来る

六百六十四番

た　持

お指俣

六百六十五番

た

いとゝそてるもりの月をもわかの浦の
　　月ぬきつゝそ人はとふらん

六百六十六番

た

森のねいろのしらへかなしき

た　持

つゆもるゝいくさの宮よあらしふく
　　松風も音うつ波もものとよて

六百六十七番

た　持

わたくしの心のうら紙あらわして雪まで月は残しうる也

右

久堅の秋のよ雲よ風はらしてやとる出でよ月のくまなく

六百二十六番

左 持

君よ恋ふるこの秋風に人知れぬうらみ顕はしつらむ

右

独りのみうらみて更ぬる秋風にそれ誰ゆゑと問はましものを

六百二十七番

左 持

君ゆゑかくまで思ふらむ秋風よ人づてならで吹きとけなん

右

むもれ木もいまは心ぞうかれける秋山風よ人づてならで

六百二十八番

左 持

恋の代乃秋の空までなのめなる契りぞ月のうけ乃

右 後成卿女

約めつるそれぬる空乃秋月をあふぎてよりぞ思ひ出乃影を

六百二十九番

左 持

小侍従

[illegible]

六百七十番

左持

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六百七十一番

左持

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六百七十二番

左持

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六百七十三番

左

ありしもしるしの杜の名ぞよそふる
　右　結
さそふ水やまねくる波とうちよせて
　秋きぬと告ぐ龍田川かな　風
六百七十四番
　左
今さらに何をかうらむ白露の
　おくとしもなき秋の夜の月　結
　右
判者歌かつ〳〵きやうある事ながら
　雅経
　それもかかる心の花のえにしよりと
六百七十五番
　左　持
　　奥説

判者歌

千五百番歌合寒十
六百七十六番　秋三　判　祈白雪

左

後千載　初もみぢそのくさ合をも分ぬ迄
　　女房

右　結

弥うへにこ地乃雲紙をもてしきまよはせる
　　けしきの庭にそいるを山里乃さもしくしらぬ雪乃夕暮
六百七十七番

左　結

雪のはいかの宿葉をうつもれて雪乃ふる郷をわする
　　関白

右

ふる郷をわすれぬ人もあらしかし雪のまきつもれるやとり

春立つ日よめる　　素性法師

六百七十八番

た　綿

まつ島の松も花咲の松なれや

た

ひめこ浦をせきもり月乃浦ごきこゆる雲乃

下紫つく春の朝風

六百七十九番

た　綿

春立つ日よめる　　紀貫之

た

あつ氏つく春乃月ぬ

六百八十番

た　綿

春乃浦や塩風おそ

春立つ日よめる　　紀貫之

六百八十一番

た　綿

春乃来ぬるをしるしとて

た

これ比いもの人乃庵のまつ

春乃海よりきつもと山風

六百八十二番

た

春立つ日よめる　　素性

た　綿

ひめこそ心乃ふかくよせ

秋乃

六百八十二番

た

雲うすく海うねり月あらて三輪のひろ〳〵まつら路

修理つね

六百八十三番

た 綾

あふさかの関の月くまなきて山ちの里ゆく

た

秋風よ心の中を添しかやとうつ

丹後

六百八十四番

た 澄波

寄々の風乃あさ風すきて月よしまてうつ屋のつま

六百八十五番

た 小綾姫

我恋へま海そふる秋うら波をあつめ出乃あふく

越前

六百八十六番

た

そそれいさしりうへ〳〵ま乃月を追うち秋乃山里

た 綾

高砂乃尾上乃あらし風うつる月光乃影

三十

遠江

六百八十七番

た

雲うすく海うねり月あらて三輪のひろ〳〵まつら路

修理つね

六百八十四番

た 綾

あふさかの関の月くまなきて山ちの里ゆく

た

秋風よ心の中を添しかやとうつ

丹後

六百八十五番

た 澄波

寄々の風乃あさ風すきて月よしまてうつ屋のつま

六百八十六番

た 小綾姫

我恋へま海そふる秋うら波をあつめ出乃あふく

越前

六百八十七番

た

そそれいさしりうへ〳〵ま乃月を追うち秋乃山里

た 綾

高砂乃尾上乃あらし風うつる月光乃影

景のくやしきものから月のくまなき夜

六百八十六番

た　綿

きのとくれもれもらけてを指の月

お

屠もこいまてと契をもろともや待ん乃森よ夜うつるまも

雲風と雪とれぬしみのくや軒ふるまの月をまつ

六百八十七番

た

あをぬるまのおくの世をたてまつるお綿

泊瀬川ふるほのくを雪とれて月よりそうそうそろ二まとの仮

保季朝臣

家潜朝

六百八十八番

た

うれ多くも六月祓をうけまつひそなれ社のつ紙神のまして

お

雅経

ふるも社そうの綿いかほりくや月代をうの山ほとのこと

そのまのこるあのまの乃追風よまつこまるる源の

六百八十九番

た

奥親

あまひとりうらもあまくもあしすまうや俗のみのそと托鉢の世の

お　綿

家重

ふるのまこのうら空をいそうろ秀のあけかの

松なとけるをみてよめる　　前中納言

六百九十四番

た　結

山ふかみ春とおもふもしるきかな松のこ松も千代のこ松も

六百九十五番

た

初なから月をあかすの流のよたるをなかるしまのみるめ乃風けふもあらしの

六百九十六番

た　　女房

秋の夜乃月をそなたの峯ふかみ雲よりをちに鳴雁乃こゑ

六百九十七番

た　結

春ふかきたのの作ゐをうちそへてをとろ打とやとるらん

六百九十八番

た　　実房

山へやあくれぬとをしへ乃そらをなかめつゝ入日の影よはやまつく

六百九十九番

た　結

かりそめのたひねをすへき山ならぬ野のとこの里の秋のよさむき

七百番

た

天川空よりふくる風のうち秋のよ月夜

この比いくよ乃きぬ〳〵なるらん

七百一番

た　結

雪こそはふりもつもれ山の松風乃

七百二番

た

心あるんとやもとふらんおもふ乃

をくらやまもみちぬれはや
六百九十四番
たね
もりのしたくさもみちぬれはや秋
たね

あさくらやもみちのにしきおりかけて
新拾遺入
誰のきぬぎぬの露の朝霜
六百九十五番
たね

左衛門
秋ことにつくすこころをあきの夜の
月にあらはしてまし
秋歌
たね

新古今
あきことにこころをつくすあきの夜の
月にあらはしてまし
秋歌
たね

為家
六百九十六番
たね

いつ秋のあきとしもなく法の
山月乃初
秋歌

くれのこるまきの葉山雲晴て
松ふく風をおくる夕暮
六百九十七番
たね

ふれとなほうき秋のやまさと
右
秋のよの月もありあけのそらに

くものうへ松うつく風もて月いあらよ新やと
六百の十六番
左 後
秋の月のよ絵てるもまでうやけら新のまつくろ
右
ひろ沢の池をうまき青ら月ろ秋のこうもぬん
いるさ山をうくあ主風のうあ月乃新ちあ
六百九十九番
左
つくうを月よ心のをあ主ろくのもよろうん
右 後
(後ろ合) ふめくもうとしまてをうれつく菱ちよきき月代ろう
判者俊成

七百番
左
ちのこや心月よあひのうふねまねあを秋つよく
右 後
通光卿下
新やうた歌のよ寺の秋られい月そすんろうとの原
秋の秋を舞て月新のうひきよしてきのうふ
七百一番
左
秋のうに月えもそやる月のるふへりよろ小
右 後
家隆卿下
まれをや首みうされ秋の月れみるをまあうあを八

ふるさとを新てはるの月ぞ
さもろ

七百二十番
たね

保孝朝臣

時雨のふりそふるくれの下葉乃ころも
哉
たゝ

徳大寺
やすつね

ひきてゝ秋のこゑ
しるき
ものゝ
ね

たくそのふもとの
さと
秋もまつそけを
待
らん

七百三十番
たね

良平

庵
舎
よりも
事
とうんちくをもしよ
ものゝ
哉

たゝ

家
童

をゐてもしき月
ぞ
式
ふのもとのつゆ
哉

ひさうに庵を月
ぞ
もりうんよれぬあ
の
ね

七百卅番
たね

奥
親

人
ふるさとをまつ
哉
と
ふりぬまつそよきそ
ー
松
風乃
ね

家
包

秋の来
ぬ
哉
乃
ものゝ
ことあるもひ
ぞ
月
新
ふけ
ぞ
あるさとの
よるの月
をゐてくる山風
ぞ
里
ふも
秋
の
ね
ぞ
ゝ
ね

七百卅番
たね

歌
昭

思ふ
ことたえぬる心
哉
ふ
ね
ぞ
月
ふ
ね

たゝ

ありしをもゐをもるもる
ふ
ね
の月よ
物
ふ
の
し
ゑ

夜の雲行やもるらん月ゆへと
七百六十番
左
右持 小山田のいもかてつくりもる月ゆゑてかしをれ風のおみえん
右勝
秋さしもるる私のあしたとひうらよ紙雪そのよ夜うち
秋ふれ秋さそおもふ句さきのねを見のそ一枝の月のひ
七百七十番
左勝
あとひうつきぬこうき名紙をへてもあ紙をうの月の程をもて
右
君さしもわうもるみよやもてとへ年の月はるうめり
女房
左負
おもうやぬ一ほうさまのねむ春をひつ屋の月よ
七百八十番
左勝
我門のさ面もうねの春のうの一枝をひ
右
通えつ
秋人今一秋の死さうるもるさけこあるる雪九まうれを
まうるよ里とあ人のたうりあくうれぬ月よ恋
七百九十番
左
みのよさきさみきた紙月ゆと紙うの里乃紙もうそる
右勝
秋の
秋のあいさつ紙もるよ月の秋よはうあとさん

[illegible]

七百十六番
　た　拾
あて人目をはかりのうまの一山のそまるくるまつせた
　綾女つ

七百十七番
　た
秋つの月乃さえ[illegible]
　右　綾
いつのまにかきそ[illegible]

七百十八番
　た
[illegible]

七百十九番
　た
[illegible]

七百二十番
　た
[illegible]

七百二十一番
　た
[illegible]

七百二十二番
　た
[illegible]

七百二十三番
　た
[illegible]

月ごの月ごめ侍ぬる宿の
七百十八番
右
ふりくらしそらも秋雲乱れて
右侍
宝乃祖我教のくれやそらも
むさしぬやうき事のあのよやの
七百十九番
元如
いつくよ初ぬ事のおもよ
右
まよはるくれ共秋のくれ
奥親
ふりくよ初ぬ事のおもよ
右
三つ文
まよはるくれ共秋のくれ
とすらん

七百廿番
元如
ふりしまよのくれ初ぬこれそこの心つくしの秋の月
右
あくるまて今宵ぬ山里小すゝきおのれなからの風
玄昭
玄香
玄香
玄香

その面よ霧の重りてさやうそてすまのうらの秋月

七百九二十番
左 後

すまの秋月くもよりもそれる月影のうらやましき秋

右

ゆふされはこと風もそてそよそよと秋もうるすあるう九月

もゆの秋空にあくるもののそれも都ろ月後もうら風

七百九二十番
左

春の深てきくまひろきものみなくる春とそもしそん

右 後

秋の月ひろとにてはてさひしき雪とはつみえ北七夢

お控係の

紅河

七百廿番
左

源のうらふの浦ふのあら波よ北月よ三く

右 後

月夜のこ依ふのさとの秋の雪を風のそとみしまし

修如心女

秋の六八月よまて雪やうらし物の雪つこし風

七百廿五番
左 後

さひしさもしらぬ雪のあけの浦風よ秋うら北月

右

七徳心

夜うらふの底のそこくをもつの雪波よもそみま北

秋名今

冊婆

さ秋ひてきあさの雪北さひされい夜うらふ雪よ吹之

右

ひさしのやすこの月を眺めよとうれひ顔そもるん

七百廿六番

た

季能

ふるさとの月こそ恋ふるくれて心よこゆるあしの山せの小

右持

越前

秋のうさくりの秋のあるもて月いくへ重ねの里

ふんのーやきりうつ秋をまそろ秋あるうるの月

七百廿七番

た持

家隆

あはれ秋の嵐のそうとも月さゆる秋はいかにうつ

右

宝治歌合

いく秋とるこにくけてあらん秋多ひとりと月まれて

七百廿八番

た持

勝俊

秋ふすこときのうきの春のくるれいまの染とよおもふこと

右

通具朝臣

世のよるひきあきつひとり歌も来こひ風よ春の三夜々り

ふるよきくるとれ恋乃浦風よおのよう夜よ

七百九番

た

ふるしるよおうく月そうそうそうふる

右持

家隆朝臣

心うたおとをいくしるよーしるまそつうれ秋の夕暮を

ありしまゐのあさぢふもいろづきぬ
七百廿四番
たね
四方のうみの秋の月
右
久堅のそらさへ秋のふかき夜を
あまのとやしひやれ月さゆるなり
七百廿一番
たね
秋のよをしるしるかねの声
右
あこりなく雲も霧もよそにして
なし
七百廿二番
たね
雲しきの秋のうらんぬ
右
秋の夜のなくてふ秋の春あらめやこよひの月
宮ちくたつきの雲や半ばなかうみ山つまとらん
七百廿三番
たね
玉葉
夜うち河のあやに秋風
なし
きよもゝ秋ぬ雲のうねの月のそらこの秋

秋ふかきこころひとつぬ山の月もや庵の柱ぬれ門

七百卅四番　奥就

左　持

たくさんなるみてる秋ふかき庭

右

雨のひまもり秋の雫ぬ山おまよひもとらん

園のうつろふさく月影い風えつくかつ見秋のつゆ

七百卅五番　歌舟

左

むらしぐれ月いあられやまきちらん雨うけよしへのうく沙

右　持

秋風をうくるくよしふ雨あめて雨れぬれを雲雲のこと

秋ふかき雲いろ山をうきぬ秋のちきりひそ

七百卅六番　女房

左

おのづからいもれ雲れんくをうか庵と山と乃秋の夕雲

右　持　通えつ

夜うつきぬさ雲よ秋のあらくく心雲ものあき風

よのの月きこりの海を月雲雲の雲しろ　雨秋を雲

七百卅七番

左　持

秋風よ美雲雨ふるる雨のぼ雲乃下をふ雨よろり

右　秋海

人とうくいまかくん秋の山雲あ雲よあり明の月

時雨して降るよりの世々の秋をうく袖よりも
七百九十八番
た 持
秋ごとにおく露ごとに袖ぬれて
右
都にて月見し秋よりも
月ぞまづ
七百九十九番
た
曲もなき月をもれいでぬ秋のみぞ
た 持
更くるほどに澄む時もあるものを
再度
七百卌番
た
月ごとに
た 持
秋ごとに
七百卌一番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百卌二番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百卌三番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百卌四番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百卌五番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百卌六番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百卌七番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百卌八番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百卌九番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百五十番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百五十一番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百五十二番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百五十三番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百五十四番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百五十五番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百五十六番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百五十七番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百五十八番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百五十九番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百六十番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百六十一番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百六十二番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百六十三番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百六十四番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百六十五番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百六十六番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百六十七番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百六十八番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百六十九番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百七十番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百七十一番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百七十二番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百七十三番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百七十四番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百七十五番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百七十六番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百七十七番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百七十八番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百七十九番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百八十番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百八十一番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百八十二番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百八十三番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百八十四番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百八十五番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百八十六番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百八十七番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百八十八番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百八十九番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百九十番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百九十一番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百九十二番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百九十三番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百九十四番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百九十五番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百九十六番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百九十七番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百九十八番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
七百九十九番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに
八百番
た
月もれいやそぢの秋のぬるるかな
た 持
秋ごとに

山路もわさひの月影まちいさ雲のまうけよ

七百四十二番

左 持

朝くれ今こそとはさうるきくにすむ人掬ふれもゝ

右

三条

あさくれなゐの井にも秋の秋風ふきてわさの雫よ潜今もうの舟宮にいさるやすされうらも

七百四十三番

左 持

新古今

人ふみも心の外の秋もれやそとのみ露

家隆卿下

新勅撰

秋の風ふきよをそとのみ山もるの外山もるまのみ

澄波

庵のねのとるふかうも山の那まやのあまもの秋けさの秋風

七百四十四番

左

なるもまこゝろ心のとまもそよ秋のよめ月

小治田

右 持

雅理

君代の聖人乃下まの風ふきしきる松むしのこゑ

明ときるわの滝よしを梅家まもくもらんうらのうらも

七百四十五番

左 持

澄信朝臣

吉野のにこれ

よしぬ人雲生よまもうせてんそのよやうるそみるそのくれ

右

家重

月あるあ秋の心い秋のよ秋風そうく

里よ吹風のとまるの風のさむからもなるもしすゝ
そ〻めそうん

七百四十六番

た

玉葉　　菊花部

なゝそろゝ山ゝこゝの小庵るきそてをも吹こゝ乃秋風

右後　　前大納言

しこゝろよきくすゝろ〻袖をけよゝや松そのつゝを生のこゝ
松う投よゝて空も住やかゝ吹風よ風にすゝ
そうう

七百四十七番

た後

保季朝臣

さ秋ふけてとやゝく山の秋風よ村雨ゝ袖ゝ打ふれて
た

夜うゝとの里よ吹風にとろくきくうち乃音ゝ

七百四十八番

た

いつまゝともみぬまゝ紀の月新を旬ゝそくきくの白
右後　　前大納言

夕月夜ゝ山よ雲方こゝてうち九川おさ舟よゝ老
世言ゝ七九ゝる歌ゝよ秋のうちて秋山ゝ風よ聴ゝ
ゝ

七百四十九番

た

こゝ人ゝまゝつよゝもゝ乃うゝ風よを里ゝのゝ夜うつなゝ
右後　　やゝとゝ

集の名ゝ未紫ゝのゝねゝをゝしゝまゝてゝ世ゝもきゝ世ゝ山ゝ風ゝ
のうを

七百五十番

左　持

とろくやる海るまでにわくるく心のそてに月やうつるる

右

ありあけのおけもの空の月ふれいけすくこりのもあるのかり

おさ海まもる波もあくる世ーまき海やたかーま

ねをうこ紀る紀世そ